

整齋隨筆

一六

内閣文庫	
番號	和 35996
冊數	15 (6)
函號	214 8

庫	文	閣	内
二四	三五九	一五九	和
函	六	六	書
架	冊	號	類



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

一 劍術 并 止 十八

一 神君御書 下 六

一 劍術 被 心 十 七 拍 以 林 録

一 日連上人 女 子 袴 卷 の 文

一 刀 劍 具 武 器 被 心

天沼

頭櫃

燒刀

細太刀

鞘纏

太刀下佩

太刀燒刃

吳真刀

石櫃劍

劍後王纏

腰刀

御帶刀

軍陣廢太刀

刀笑

一 髯 白 髪

一 劍術 試 活

一 薩州 藩 劍 術 試

一 本 藩 本 陣 録 圖

一 二 寸 爪

玉劍

大太刀

劍太刀

護刀

小刀

太刀

太刀 帯 名 草 紙

狗劍

鞆 二 劍

太刀

刺刀

服 刀

刀柄 係



一	太刀緒	後鞘	鞘口	鞘
一	見鞘	蛤刃	葵鐔	白銀日貫
一	鷓目	季札劍	竹柄鎗	
一	旗	青旗	旗手	指
一	鼓	小角	大走	逆茂木
一	鉄炮	皮	大返柄	吳床
一	相模	燧石	韋	豹皮
一	葦麻	蓑毛麻	二毛麻	行騰
一	腰當	針貫	合歡木	
一	トシトル	フー	デル能功和解	
一	奥州河泊奇談		経津主神	
一	武甕槌神		素鳴尊	

一	浅草寺地中坪叙	一	古老物語
一	切腹の活	一	酒井舎人家来切害
一	東漸寺由来	一	麻生俊平人物志
一	芭蕉根	一	筒易方
一	長門大判図	一	加州花降銀図
一	兎兎滑稽		

有沈生滄雨者。形一目。影頗長。至文許。即胸以下連。縮三大倍。而拂地者。尚又餘。德而計之。殆逾一丈。有半矣。其所罕見者。其力久。小有。然厥狀。待。汚。無。是。力。按。君。技。折。股。而。相。法。對。大。長。者。主。兵。克。亦。一。駭。也。

慶長六年辛丑日正保元年丁亥歲是甲午年八月廿

李太白上韓荆尺書云十五好劍術偏于諸侯
 富商云唐時猶有神仙劍客受劍術為狹
 書叙指南云積竹杖
 假字甘り

劍術

李白上韓荆尺書云十五好劍術偏于諸侯
 富商云唐時猶有神仙劍客受劍術為狹
 書叙指南云積竹杖

髯

從來髯最長者或稱過腹或下垂至膝止矣吾郡
 有沈生滄兩者眇一目髯須長至丈許自胸以下連
 縮三大結而拂地者尚又餘總而計之殆逾一尺有
 半矣真所罕見者其為久小有戈然厥狀猗猗淫
 汚無耻是為力按君杖折股而斃相法髯大長者
 主兵死亦一驗也

慶長六年辛丑ヨリ正保四年丁亥歲迄四十七年ノ間外國

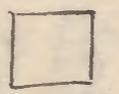
金銀銅ノ大数金六百十九万二千八百兩余銀百十二万六百
八十七貫目余銅二億二万二千八百九十九万七千五百斤余
石銅ノ大数慶長六年ヨリ宝永五年戊子迄ノ大数ナリ
新井白石翁ノ五事畧之説也委クハ本書ニ見ルヘシ
正保四年以来今天保十一年庚子迄百九十四年ノ間交易ノ
銅積而莫太ナルヘシ彼国ヨリ来ル所葉種ハ用途品ニ
モナルヘケレト其外鬻甲羅紗更紗唐棧ヲ初我國ノ
品ニテ事カケザルモノナルベシ惣而唐物ノ珠器ヲ喜フ
驕ヲテウシ欲ヲホシイヘニスル根ニシテ衰國トナルノ萌
歎スベシ然ル莫太ノ金^銀銅ヲ外國ニ渡シ近年并續キ通用
金銀改替有リテ目方ヲ減シ位下品ニナルト雖何ノ益
トナルニヤ

神君御書

以一張弓勢定天下
以三尺劍光安國土

慶長二丁酉春三月

御諱



大久保忠悳授与之者也

此御書如何ナル故ニヤ勢列地士池部々三右士門所持セシカ
波後ニ丸屋五三郎手ニ渡リ大久保加洲へ返シ進ント申トモ
商家ヨリ上ル事ヲ憚リ豊田庄兵衛ヨリ御代官中村八
大夫方豊田ノ家へ参リテ受取大久保家へ返シ納メシト云
天保六年

南階は雨皮とくの一もぬ風聲やしよせ南門ま
さにもくもきて袞竜のうこま出のく叙重とらと
よりともあちあきさじの侍者のくくた若よましりま
てや門うきとて侍も侍とぬあを志すかひぬか—こま
ろい葦よ葉まのせ—駕雲下の素りあまぬと
おこか使—き地下のつかわ—といにまき—たる
や神祇官とけ—志志かひまきる人—器具—
てかき阿まきる持所した—まおとあ—元人か
き業よたぬ

か—こころの仮初も清河とに志すま—と遠曆のみ
か—とま—の作らとけり—い—とや—し侍る
人あま—とあ—と葉はよ—と—の何
とあ—かくつ—つられぬや—か—
されいはひ—防火の命と志志—都ちかき—此の

のぬを勢のほさるるさるりに丹波の回亀山の何
か—火あるるゆうに馬よ教うら叶休うらま
ま—のあさ—るって行幸よ系りあひてはこと
のをと—のみ—海不那常—此まの—とま
形代 尋常のつ獲のものをぬは—りかけたる 風志きりされ
ふとちこれ—のやに—ぬ
ま—雨よま—も元あ—の侍者の人—衣冠志
—儒てむち—の—侍をむる中よ或—と
んある—草鞋—ては—の南つはむ—
よ日持門をゆよ石葉作と東よ寺所と北よくち希
て加茂の志のの—や—り—持みの—ぬ社
頭のは股正とかりれたま—と—原殿よか—二あを
まなりぬ
か—るとま—か—とあを志志め—つかま—よ

のたあ〜まや 廻廊秋を信まの人のやすら
ひとて志ま〜ほとふたちあ〜て水よあ〜いひよ
ふと〜はたか〜くあ〜の〜宮つあ〜も〜さあ〜う〜
さぬよめてあつ〜ひ〜う〜りか〜り〜くあ〜ん風又と
ア〜て元よまのふ燈のた〜く〜まや〜れ不のほあ〜と
さ産ふとえあ〜り〜とみや〜らあ〜〜り〜ま〜て〜りか〜
やたけ〜れ〜や〜南の方より一丈中りな〜り〜えたる木
の吹まほひ〜り〜月よま〜ひか〜る〜と〜あ〜せあ〜る〜に〜は
か〜〜し〜は〜る人ふと〜い〜もはま〜あ〜く〜を〜居か〜て〜かりの
おま〜〜に〜池系ア〜て〜月侍尔業震法原のま殿つ廊
なと〜と〜あ〜火か〜〜と〜つ〜と〜菱〜〜た〜ま〜く〜と〜あ〜ま〜ま〜あ〜お
そ〜後〜〜〜ま〜あ〜と〜一〜雲舟の舟のま〜ま〜か〜る〜燈
燼と〜た〜あ〜る〜の〜と〜あ〜の〜つ〜と〜あ〜か〜ら〜て〜む〜き〜ふ

斗の舟母社殿とま〜も〜ん〜孫た〜り〜と〜て〜か〜れ〜此〜社
よ〜と〜風〜聲〜と〜ま〜ま〜ぬ〜〜と〜ま〜〜河原ち〜り〜つ〜り〜勢
のよ〜と〜火〜ま〜ま〜ぞ〜ふ〜舞馬に〜つ〜り〜ふ〜も〜え〜ま〜せ〜り〜其
〜と〜や〜〜病〜あ〜〜り〜と〜い〜ま〜ん〜と〜あ〜を〜た〜〜〜〜と〜又
海〜よ〜り〜東〜と〜舟〜使〜〜と〜する〜お〜あ〜あ〜ふ〜く〜や〜り〜あ〜る〜と
む〜〜に〜あ〜む〜ま〜の〜船〜よ〜りの〜ほ〜と〜神〜ふ〜さ〜く〜お〜ち〜〜れ
か〜〜ふ〜い〜ん〜と〜さ〜ら〜〜病〜乃〜や〜と〜よ〜ま〜ま〜ま〜
雲舟と〜ま〜の〜の〜ま〜り〜と〜舟〜た〜れ
風あ〜〜ふ〜る〜の〜舟〜と〜神〜よ〜辨〜ひ〜は〜
は〜〜り〜つ〜り〜と〜ら〜〜は〜む〜う〜と〜舟〜ゆ〜
窓のま〜〜る〜物あ〜〜ん〜平〜復院法親王の〜ま〜や〜ふ〜新〜奉
ま〜り〜〜て〜あ〜〜は〜かりの皇居と〜さ〜〜め〜の〜ひ〜は〜あ〜〜り
ハ〜よ〜と〜あ〜〜か〜〜し〜と〜あ〜〜こ〜さ〜ら〜ら〜ハ〜お〜好〜〜宮〜よ

世のまうぬ 修院ありし 院よりききしむるつかり
和子の席會とて人々めあつめられし志を
むらむらとせしききされしをきく白河のさと思ふ院
乃まうとつらつせらふ信まゝと物より右大臣を
しめ大女院に右女御の幸ふ花やそ火あつた付き
ばより田三位まにうらむおらむはまは風のふく方
ふもとなしとや又東山の隈寄るも花しをむし
まひ老むかの人たぢねと初免女院も花井まよ
らせのむらむ是もあやしくて一条とといふ所の林立
さのまふ女一まとおかしくつらむはれまゝいふ
人よりた大夫は女一まとおかしくつらむはれまゝいふ
つらむ衣冠布衣あひまらぬゆ使たてはうし
平あともいふかゝるゝの夜あけもてねくまに

橋鼻親とのお師相會客の朝とけしねとものこ
る方たつて横竹にまくの文書日記見るものもの
残りぬとゆいせは世の幸ふあんむらあつたやけ
のころおよりもあつて長きとて河の日記ハ程
りつらつらつて糸の方ハ火やまぎらうらればつこ
をらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
かざりふらふらふらふらふらふらふらふらふら
はふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
二条の城郭あつちうらうらうらうらうらうら
と稀るるといふはね高家あつたうらうらうら
つらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
こはは地よりうらうらうらうらうらうらうら
まねたまたり億載の久き御祝ひたまへる四禽

圖はかるひて石易の帝定なりしとも流季は及ひ
ていそん焼くも作と治まるともいふりて
あゆてたて薄を又もそのやうやにくりかせる
るゆくなとせしまばまよけん今やかこをいふ
ぎお大八の國志はめい風ふるひま氏くす
の恵あまのほ代たどと去年有つるすなとお
こむらくもてめていほ代の志るに志るす鳥の
いそ来て諸道の藝文たあめられ又もやこふ候たぐ
るおとこねとあとなりあちきあこの志つ山はよ
いゆる述禁城とあまふりめくりはゆるも
たぐりあひりあつるも我をひ程とよとこれ福をいけ
てあはあまきなりらむ大尊命もちりきあといき
て業者部のはらこりけあちて思祀主基乃

御帳を連くもいそあさあきとされたるを具し
ていりくく作れられし神明と納交志のあん
は年かるといそ世のいそめと作又めつるか行る二日の
の山羽降くも張りし作をいふふぬものもあま
んとあまやまらとこのいそめと廢明とありやな
しや焼このまうとといふ宗廟といかともつあたま
いぬよととと下とぬとこいそりしと代あくるも君候
あまなうとと實といそりしやまめあまのいと
ひまらやいこつたる世の之とよつあつとけしと著
乘は極めておのはめと國利したるとねねなりとも
てあむと天地命とあつためと淳朴のむうふかえ
とんのあまのいそりしと継承つしと鬼神
あかるとる危れしと万治定文富永のしとけしとや

代は不お績志より予祖又洋司節在焉のを由々の
下よ志く十四歩の比より執らみて修りなつてを志く
けり或時先生云洋司の足下ハ執らなれ大性
不常用と云通は達せん事そん来を云通義の云
劍道ハ義士武の嗜何ぞ功拙よりなり是を執らんや
たしく業ハ修ハせざとも由之立をりしと教じ修り
修りせよと云又云是下先以て中を一通業の昇
達せん事ハ氣ハ盡すよ武藝ハ劍術ナモあらび
余の武術をたしんむらんやと云及く修らんと仕
らんあれど一端は通は志何共今又ハ惜せんや

此而創しりしとも由通守傷ハお席出るものと云
たまへたとく昇達ハおの心をよ何ぞ先生教の
布らるるよ何ぞ吾及んらんの新ことと修り不
怠しと修よぬ然せりも後導傷と云き守り
らるよ凡三千人の門人を導きしより人と只志乃
有る小方ハ事ナらん

一 薩列家ハ藩ニ珍本洋五作と云る劍師あり流
秘の志ハきりらるる或日大吏職の人洋五作と云
てあり物修の折らる凡武藝を誰と云人上
ぬやと云ふ此云えと云何と云人種術の上

負たりと海を治すおある一たる太刀海を治る股合
よ授たれと手振方辨いと一とくよ見不くと日横
さぬこぬひらるやけ業を感へしと自分ハさふ
よ不及我門人百位午祀も百連年と口命在馬つ
人としてなりぬ後日と主時と勝負の物語りせしき
海を治すおある一とくよ見不くと日横
ようきりりてと奇業といふ海を治るは横にぬたぬ
今く是下の輪先と振とてつ路いと業ありてぬい
たりと治る海を治るハ人カある別の様と申たて
いんき人の相手を輪先掛たるともいんけと居る

大カとやらの海一とく人カとハいふよとく水海
桶のぬ替と申人丈八人よとくつとと只き
いふと扱と申とくやけ事一兼る海を治るは連治
とてと申すの赤存影目と書字結といふと乃國付
きるとて物語とくつととぬ

地ごとくは花なりくくみとのむら事みても
いまは花種あり

三ツがいん安也よ火宅志もくもくゆんぶん
ぬのぢ有生老病死憂患如是等火輪然不
息とふかれりよの文のふはえりけりちりあ
はるなり火の肉のとこりあはるるき
なり是と老をむるくければ死に老のつかる
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
の中とくくくくくくくくくくくくくくくく
らみみのくくくくくくくくくくくくくくく

ちきとみりくくくくくくくくくくくくくく
ふくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かたきくくくくくくくくくくくくくくくく
道くくくくくくくくくくくくくくくくく
親と何とあはれんをたたくとあはれんをた
るはあはれんくくくくくくくくくくくくく
念せくくくくくくくくくくくくくくくくく
とくくくくくくくくくくくくくくくくく
福のむくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく

いまはわや〜くわわはは何事とあらふも題目
さくしにゆたぬ〜したるす〜む事いふやあん
少〜事〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
むやくせむはせむ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
るあ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
り〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
か〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
む〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
た〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
かく書〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ

あ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
とた〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
〜病中の血氣はく〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
く〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
ふ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
少〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
と〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
る〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
て〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ
神〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ〜くわわ

されまゝおのりされをいれよのにおろしてくはし
まるけいかにあはれとるあはれひのちとあてや
くならいかにあはれとるあはれひのちとあてや
いはちとあてやとていひまうてとていひ換もの好
道と縁いふ縁おたたらいおきとてんぬまうふ男と
物とくくみいすてものいさうおむひ切て我いあま
くせりれくいんちりま上人とてあやう仏のあま
とみ神ふちとあはれは病のくうこ生光病死とて
たうてかあてやとのあてやいんちりあてやの事とあて
くくを心算のたきあてやうてあてやなとあてや

述せまばせの途よと打まおせそ有うういあま万
年いまうああてやいんちりあてやいんちりあてや
ひたれくもるしも各あてやいんちりあてやいんちりあ
すくたまぬいあてやいんちりあてやいんちりあてや
いんちりあてやいんちりあてやいんちりあてやいんちりあ
あてやいんちりあてやいんちりあてやいんちりあてや
ていんちりあてやいんちりあてやいんちりあてやいんちりあ
秘の苦うかてあてやいんちりあてやいんちりあてや
そくくいんちりあてやいんちりあてやいんちりあてや
とあてやいんちりあてやいんちりあてやいんちりあてや

侍

侍

浮世はくさかたれをすむ月也くぬきむくたなり
池のふよががふ月をいむくぬきぬきぬき
としつれきの名をありとほゆの難所のふと後のを中
まはふとくふとまはふのまはふとくふと結凡と
まのやいふくふとまはふのまはふとくふと結凡と

刀 劔具 天沼矛

續古今集

久々の天よりおろしむるこの名あるふきくすのこり

吳真刀

日本書紀推古天皇紀

宇麻奈羅麻呂辟武伽能古摩多智奈羅麻呂禮能摩
差比

玉 劔

萬葉集 卷三 羈旅發思

玉劔卷寢志妹乎月毛不經置而八將越此山岫

同 卷三 寄物陣思

玉劔卷宿妹母有者許增夜之長毛歡有倍吉

柏劔

萬葉集 卷二

柿本朝臣人麿

真木立不破山 越而柏劔和射見我原乃行宮爾

同 卷二

高麗劔已之景迹 故外耳見乍哉君乎戀渡奈牟

頭槌

日本書紀 神武天皇紀

弥都添都志俣梅能固 邏餓勾鷲都々伊

石槌劔

日本書紀 神武天皇紀

勾鷲都々伊異志都々伊毛智予智豆之夜莽務

菟區喻弥 並末利椰

日本書紀 神功皇后紀

阿邏々麼菟麼邏麼菟麼邏 珥和多利喻祗氏菟區喻
弥耳末利椰 塙多具陪

大太刀

日本書紀 武烈天皇

飲哀陀撒鴨多梨播枳多撒氏晨寄儒登纂

韓國二劔

新撰六帖

かゝるのぬまの劔はむしりて君のちりふまゝめをきてし

麻久良多知

萬葉集 卷廿

大伴真足女作

麻久良多知已志爾等里波岐麼可奈之伎西呂我馬
伎已無

燒刀

萬葉集 卷六

湯原王步酒歌

燒刀之加度抄放文夫之擣豐御酒爾者醉爾家里

劍後玉纏

萬葉集 卷十

寄水田

作者不知

劍後玉纏田井示及何時可妹乎不相見家戀將居

劍太刀

古事記

袁登賣能登許能弁示和賀淤歧斯都流歧能多知曾能多知波夜

萬葉集 卷十二 寄物陣思

劍刀諸刃利足踏死死公依

同

寄物陣思

劍太刀名之惜毛吾者無此來間戀之繁爾

同 卷十九

劍刀許思示等理波伎安之比奇能八拳布美哉左之麻久流

同 卷四

山口女王贈大伴宿禰家侍歌

劍太刀名惜雲吾者無君爾不相而年之經太礼者

同 卷十六

境部王詠數種物歌

虎爾乘古屋乎哉而青淵爾斂龍取將來劍刀毛我

其露寺職人尽哥合

ニキ

いふ小せんこかひしつゝぬはる多刀之のなつ月のさひのうら

古今六帖

劍太刀よりりもの上小雲あれて志ふかし志あんまつりゆもい

同

つる多刀身ふしきとつる多刀身たや忘てあめおまはひぬて

同

刃太刀の柄一けり我いか一君子あてきて年の為め

同

刃太刀の柄一けり我いか一君子あてきて年の為め

同

刃太刀の柄一けり我いか一君子あてきて年の為め

同

刃太刀の柄一けり我いか一君子あてきて年の為め

新撰六帖

刃太刀の柄一けり我いか一君子あてきて年の為め

太刀

赤深衛門集

刃太刀の柄一けり我いか一君子あてきて年の為め

腰刀

刃太刀の柄一けり我いか一君子あてきて年の為め

新撰

刃太刀の柄一けり我いか一君子あてきて年の為め

細太刀

夫木抄

信實朝臣

刃太刀の柄一けり我いか一君子あてきて年の為め

腰刀

新撰六帖

刃太刀の柄一けり我いか一君子あてきて年の為め

護刀

後拾遺集

入道前大政大臣

刃太刀の柄一けり我いか一君子あてきて年の為め

刺刀

貫之集 後撰集十九離別所見

おろよらうたたく火の煙あふいふさげを去のしとせぬ

曾我物語卷五 けさいけの女

いせくとさひの刀と忘るいせしものや人のえりしむ

同くー 握系うけさ家

かみしとておきてあしよのそもふかむせしこそさひのぬれ

夫木抄 六帖題 民部が為家

よそとそひぬいさひとそぬ古刀さんにはせよいぬひたてとも

古今六帖 刀

あふみのうさけーたごたごのたぬに人のこひらるうけ

小大君家集

いさしとさひーやのういぬさひいぬりさーとせしーくやぬぬむ

同

わひとみさる刀はぬをかすのいぬもあーぬぬぬむ

新撰六帖

何よとせひぬりさるとさひーかぬぬのしらぬうぬぬぬぬ

同

拾やぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

同

今いぬれまるとにさひさるさーぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

同

やぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

同

からぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

鞘纏

日本紀崇神天皇紀

柳^ヤ句^ク毛^モ多^タ菟^ツ伊^イ頭^ツ毛^モ多^タ鷄^ケ流^ル餓^カ波^ハ鷄^ケ流^ル多^タ知^チ菟^ツ
頭^ツ邏^ラ佐^サ波^ハ磨^マ枳^キ佐^サ微^シ那^ナ辞^シ珥^リ阿^ア波^ハ禮^レ

甘露寺職人尽哥合

さやまき切

うき雲のとしるるふねいさやまきのむきこみくらふえゆる月が
同さやまき切

御帯刀
御急はまらさやまきおやれよのぬる人のぬきといふせん

夫木抄

よみ人

こころをぬの池の蓮をよたぬれるあの新傳あこころせし
小刀

甘露寺職人尽哥合

さやまき切

夫木抄 六帖題

正三位知家卿

今さらけまらけよさける小刀のしんつれぬみとをぬあ

新撰六帖

かちさきまらけよさける小刀のしんつれぬみとをぬあ

服指刀

九列道之記

源藤孝

軍陣の代とよさるすのなこたしきめいのみぬが

太刀下佩

捨遺集

白ののめぬきお太刀とさけなまきくならぬれおをゆやたふと

軍陣廢太刀

ト傳百首

今のまら太刀いさるるといひあささ刀とおあしかなるゆ

刀柄縁

ト傳百首

柄はた、革もまきれるおはか、糸を巻けはぬれかきみ

太刀焼双

新撰六帖

たち

からやならたち此をよはのよやくとうゆひきりてけきあふ

刀笑

新撰六帖

刀

何こをゆむひりともたれかきそのうちや刀やあは

太刀帯取革

續後拾遺集

觀意法師

かひひぬ家のぬきあはちやとひりうさぬ神志ありて

太刀緒

萬葉集

他國示結ニ婚ニ示ニ行ニ而ニ太刀之緒ヲ毛未解者左夜。明家流

古事記

多知賀遠母伊麻陀登加受氏

拾遺集

業平朝臣

をうハのむー

はくしよりこえまてくれとほしきあき太刀のとうハのむーれとあき

同 神樂歌

はのふみやや男れちるしひふみの緒をそくちかよりん

萬代集

いそのふなるの社のち刀の緒のちきためし我君乃ため

後鞠

萬葉集 卷七

旋頭歌

甘露寺職人尽歌合 三三

いづれもをぬりてをけるまがたのあふぬきよのふてはるん
葵鐔

夫木抄 六帖題

信實朝臣

あつたまふてはるぬあふぬきよのふてはるん
白銀目貫

拾遺集

白かたのめぬきの太刀とまげし事そなふれぬことわらふたうこと
鴨目

夫木抄

源仲正

るうれかたの志とまげし事そなふれぬことわらふたうこと
季札劔

金葉集

俊頼朝臣

季れの劔とまげし事そなふれぬこと

なまきぬふりける太刀もあるをさやほのろふり守れぬこと
竹柄鐔

三好成立記

つ波武老ハ代々とあてや突ぬらん秋澄の物と升ふてはる
旗

萬葉集 卷二

指舉有幡之靡者冬木成春玄来者野毎
青旗

萬葉集 卷二

青旗乃木旗能上乎賀欲布跡羽目爾者雖規直爾
不相香裳

同 卷四

家當吾立見者青旗乃葛木山爾多奈引流

同 卷十三

隱来之長谷之山青幡之忍坂山者走出之宜山之

旗手

南朝紀傳

御製

屏振海中雲之幡之手仁東之塵於拂不秋風

楯

萬葉集 卷一

丈夫之鞞乃音為奈利物部乃大臣楯立良思母

鼓

萬葉集 卷二

齊流鼓之音者雷之聲登聞麻低吹鄉音流

小角

萬葉集 卷二

吹鄉音流小角乃音母歎見有虎可吼登諸人之

大走

夫木抄

六帖題

信實朝臣

くつれもあやれついちのむらゝアサとこゝろあき秋乃か

逆茂木

夫木抄

述懐百首

俊成々

世世中いせきとにうせつはとてのりれとをぬる身ふこそ者れ

同 梯木晁供百首

後九条内大臣

山陰ふなきのけりむきむくもせせはしきことハ程をかよふ

同

山ありやのけりむらひくもよのしきことハ成地よりむ

鉄炮

北条五代記

氏直

地ふくくるとはねむ思ひあはるるかと思ふは神の珠炮乃火哉
敷皮

夫木抄

衣笠内大臣

このまゝ海驢の孫かればやめぬ由めありなうたつやとんかん
大追物

吉野拾遺

隆俊

あつさり引てとつる山立はあぢふまのこまよあぢふん
細川高圓

おぢふあぢふとあぢふいこうのあぢふもつるよあぢふ

吳床

古事記雄略

阿具良韋能加微能美豆母知比久許登示

相撲

井露寺職人尽歌合

さきまのう

新あししとくくくれははまきぬ月をころにあて移る
同

我らひきらまの氏のおきあれやうふたふあふ人のあは
羊中行夏哥合

相撲

女房

かまけてこころつぐみのいぢきいりふれぬきてためとぬる
同

はーのそあけまふよりお撲せぬとこはとらうきまらぬ
同

夕のあぢいのまの河あひてとれまのてんととるん
同

さうよあぢふいりてとらうけぬる占よハ洗ふあぢふん

一 ドンドル。フリーデル能功和解

ドンドル。フリーデル雷ハパンゲリヤ国都ロンドント云所引、ウツ
ツ名ケイキレテ術ノ理ニ精々火術ヲ發明シテ世ニ名譽アリ
リ然ニ和蘭曆教一千八百七年本邦文化ニ至テ此ノドンドルプ
ーデルヲ始テ製造シテ国王ノ命アリテ廣ク之ヲ世ニ公々
ス乃ロンドンノ地ニ於テ大ナル座ヲ建テ世ニ弘術ス而テ近
来萬回鉋術此物簡易使用ニノ用ユルニ先ドンドニプ
ーデルヲ鉋導火穴ニ附接シテ火蓋ヲ切ニ火歩火繩口薬
等ノ扶ヲ假ラズシテ火ヲ點移スル一最迅速ナリ之ニ
因テ近來ヨウロツパノ地ニ於テ狩人專ラ是ヲ用ルニ雨
中水溫ノ妨碍ナリ殊ニ遂ノ音及火繩ノ臭ト無シテ狩
人ニ於テハ實ニ便利簡要ノ一奇物ナリ其外懐中スウ
ーフルトツ硫黄木ノ及カツプス投玉ノハル投玉ノ如キ此外火薬ノ類

許多アリト云トモ何レ此ドンドンブーテルヲ以テ製
スル者ニシテ諸々ノ火系中ニ於テ最モ奇々妙々能力
アルモノナリ

一 寛政己未首夏奥州河泊奇談

奥州之衢有業種植者謂長藏齋樹於巨室致富千萬有
一男子父母深愛焉八歳而穎悟神彩秀徹容貌美麗
学書頗善大字郷人皆稱曰奇童戲園中後薄暮至
半夜猶未歸于屋故父母驚愕悲哀焉宛如在人或禱
鬼神或頼卜筮筮者曰此童也非人類也此夜於此家必有異
事矣筮者去則及深夜屋東有童子之聲父母悅而疾走
見之則於松下有其衣與織書父母抱其衣而哭且聞見其書
則文曰吾雖為汝家之兒非人類也汝昔歲遊江邊時於

水中石上得美玉，歸于室，是則吾所寶也。失之以來，不能居于水中也。因而為汝家之兒，欲得其玉，然而收之石函，埋土中，不得取也。是以歎焉久矣。今日偶開其石函，故竊得其玉而去也。開其石函見之，則無一物也。鼓掌大懼矣。呼其妻，語其故，痛哭曰：八歲為吾子，而今如此，噫，奇哉！如夢而已。憐人亦聽之，無不感歎焉。及于日中，彼江邊之巫祝二人走來，而至于長藏之家，而見曰：於此屋，昨夜有何異事也。於江頭之神祀，有樂舞之聲，竊至而窺之，則有白髮翁舞于社中，則頓首，巫祝聽其樂聲，則曰：善哉。今日得美玉，巫祝問其故，神曰：吾昔歲於江頭失寶玉，時有長藏者，得之以歸于其屋，故其以來不得水處也。今日得時，得其寶玉，歸也。故鼓舞焉。故告此異事也。長藏聽之大驚，而頓首，再拜敬焉而已。

一 釋日本紀第六曰

天書曰：經津主神者，天之鎮神也。其先出自，諾尊初，諾尊斬溫突血成赤霧，天下蔭闇，直達天漢，化為三百六十五度七百八十三般石，是星度之積也。氣化為神，号曰磐裂，是謂歲星之精。裂生根，裂是謂灾感之精。去生磐筒男，是謂白之精。男生磐筒女，是謂辰星之精。女生經津主，是謂鎮之精。云云。

又武甕槌者，天之神也。其先出自，稜威雄走。昔有大圓霧，方四里計，其中有小孔，化為石窟，窟中有神，是謂雄走。生甕速日，甕速日生，燖速日，燖速日生，甕槌，々々生，而個儻形，儀鎮，頸，躰，勢如狼，摧武植之志，懷霜雪，称拳，武藝，云，并主進，列在八十諸神上。

天書曰天兒屋根命者天忠神也其白如日其心如海其德如地天神感其德莫不來從天照太神極善拜為掌神禱

天書紀第四素盞鳴尊性既勇悍武急而猶有直心至此尊性豈以醉睡之人誅之哉偏睡者如死之骸此非大夫之心焉以十握之劍之背及令扣八歧大蛇之頸時八歧大蛇憤怒吐出涎水滿敷川瀨既欲流八之假殿于時尊以十握劍乃真及而持斬其蛇之首身至尾劍及少缺依之跨其尾踏八之武足而出色割裂其尾視之中有一及鹿飯卒令十握之劍師缺之麓祇視之此劍者非眾神所工故素盞鳴尊是神劍也往時所夢之多力雄命所奏也吾何敢為私利乎乃載荷於天羽舟上獻於天神是則草薙劍也或又曰叢雲劍号草薙者草者乱而無立足以常之錄薙之猶無殘所以此劍薙葦原之不順者如以鎌薙乱草焉依之有此号云云号叢雲劍者大蛇所蟠之水川上之中空有此紫雲之氣常橫大蛇之邊之山嶺故有劍有如斯應此名云云

一 浅草寺拾壹方千五百九件三合八夕三丈

日本堂并庭廻廊件九千六百三十三件三合二丈

仁王門西宮社地之内東方新丁家合壹方千壹百六拾九合四寸
馬道境内町方千三百九十九件三合八夕五寸
觀音堂後火除地六千二百壹拾八合七夕四寸

雷神門の馬道田可境内因述 四千七百石係之合々七五
富士法界表下 百石坪合三々七五
目石道坪六百三十坪合二々九五
駒取四十九坪 同宮地廿四坪
法華寺并梅園院代受の地 二万六千二百石九坪九合九五
西火陸地 壹万六百坪
寺中三千四百石 四万六千二百石三坪六合二々二五

一 御石御取上等役勤澤屋或左衛門公孫麻と云老人
五甲別流兵法弘く達し徳よのよよ服練
ある人よよ予常よ交り古き咄りど尋しり
朽く我の朋友よ老翁よは人の掛練と
よよ常よ金子をある同百文結合二つ不持
ひかれど印出させざりし人のよ一或日神
訪せせんと未胡よりりるに逢中を真
劔太刀打ち音志しりし法少横丁おみそ
たし千れば二十廿存もお行しき若士乃
五人勝負を交せんとす故に前白りし由

妻不替扱く存ひと聲掛けをばあ人もまた
右首の道にけりよ老人の之定る余の^事幸
ひを事の子細し知る味も未也仕事此
の物より女親しつるけ老人よめや我等よ
新く治ひとむとせり云れを每人口と物
一礼して出梅りく水通りあえづくるは
新く次第違てと云何ゆふは時刻候りて
恙感事なゆふあお候ても勝負とせせん
といふは是非を備を通りてさう又と仰
けり命やうと云ふと云ふをんれは吾人

ハお果されき人ハお果しける死骸は腰打掛て
切後して舟りうりて志事とあて
若しものを推しうりて是れ為一日の念佛二百遍
御生雁唱てやりきりて予も仕事以はあは
を園一事して年月場を扱きあは尋ねる
しる事念なり

一 豫列大例の落はるる後の事なりし何某と云
よの一人寄對し士道之うりて事ありてヤ
次のもめ切後さんと云候とさう同僚の戸田
正長と云ふのと別に見事な存候と云ふ夜子母の以

生害を遂げんと云日暮く冷ゆるも思ふも
まよふも切後くま切はらめしむどあた
るも知らず見苦まかしく酒と呑んと云く精氣
我斃んよしく可成とく茶碗二三杯吞替
あつと少る麻交中よまのせ松打どあ
てふ暫時休志とく然るに大鼻イナキゆ
麻入たり正氣はけりし思ひやうい今目覚む
たさげん苦りかしく斯ら待終麻入きりま
刺通しぬるをやとい思ひくれどお節か
よ人の飛ぶとやせん角と思ひ頻よん中

我まいのやり當人乃麻入きり神入りくれ
ば今まを終麻入し俄よ飛起るをやま
事しぬるも死よおむし時ハ人よとあつて
可成やと云正氣あらぬ候あつてもそ終る終
と麻入きり目覚めあつて吾ん苦まかしくお
をよと夫の深くお考あつたりし一人貫通
あつたりしりある事しりよ當人のまを汗
我よよあつたりれを刺通したると思ひ
傷く目覚めたりと云よよまの酒りやい
夜まひりや自害とや可憐正氣の志活也

浮橋本に依り
文政雜記卷
三十三

一 神田書意坂下酒井令人家外用人山口平吉等と云
老文政十戊子六月廿六日曉七時半時以何志やん
忍入支障たよ切害よおしし主吉ぬ平吉等支障不
たし醫員ノ鼻口掛守能た後吉人能同肩先
守能同後吉人守能たよ自守能合守能不
同人妻十一ヶ不の疵不よ々 兼明迄と息ありて
因及目付役おと惣對も出守りて右平吉支障
不後吉人御し和より刀洗切先以守能折
ゆより也医師守能体人何某疵に改めしと云
五部しと云と斯疵不吉暫時息のありたり

泣氣きり

貧福嘆

人乃貧福有分量下戸未乃達三藏
能得実留子兩袋一升自是一升囊

愁埃厲

五車

歳々愁埃厲寒風骨不逃如赤子
口日啗萬能膏

清由來書

權現様

清尊殿當寺奉

清由來者尚寺檀方柏木長尺馬の正重者

権現様 若年々清奉以中上 清七十日賀之節

清の奉仕為 深心 清殿元和二丙辰奉

奉の以旅後序

清宗 清自自下在取取仕干後江戸

台徳院様 清奉仕法基不願お初之節

一 清殿俗家奉安里の奉 忍多寺存存而

寛永二年癸未正月十七日當寺薬師堂奉

御遷宮の

一貞享元甲子年二月廿五日 出守山社より

阿部豊後守教田下徳吉殿を以

常憲院様 御拜出の 出守山社より

家督山部三傳正方同表子長左衛門正種清由緒

中と云

一元禄十二辰辰年二月十七日 柏木長左衛門正種清

長左衛門正種錫の清篁を造り石の御施と

彫り細工をまじり茶師如來と所因殿内陣

御居座なりと云ふ

一寶永三丙午年二月十七日 柏木長左衛門正種清

表装を改め御清由緒の中は御由緒書付を

細工を以御軸の中は書付の字印をお忍り通

り社に括御表装御紋合禰御道具共

一正徳甲午年 清歌掛巻奉造管の

高七尺 幅三尺 奥八寸五分 黒塗也

右之通清由緒を當寺に奉り

御清由緒を以奉り

清歌新編端

葉除別表

十明上人書 東嶽山末 東漸寺

御軸入書付寫

東照大權現様

御影於駿府

御前御手親

父柏木長左衛門正重

頂戴之

正重

從若年

御膳方御奉公仕度々御陣中守役儀盡忠

勤

大樹秀忠公奉仕来江戸

御影為令清淨寛永

二十癸未年四月十七日淺草東漸寺齋乘

之時藥師堂奉納之此儀貞亨元甲子年

正月廿五日御尋阿部豊後守堀田下總守

大樹綱吉公達

上聞元録十三庚辰年三月十七

日東漸寺義榮之時世正重二男家督正方甥
養子正種等專不淨入鑄錫造御篋彫石
御櫃外建方丈^文庫内陣藥師如来同奉
鎮座寶永三丙戌年九月十七日奉改一七日正
種東漸寺滞留義榮相共以清淨奉行之
連日天氣快晴成就予子孫主忠信長可奉
拜礼者也

寛永三丙辰年

祖父

柏木彦左衛門正次

九月十七日

父

柏木長左衛門正重

正重二男
家督

柏木四郎兵衛正方

正方甥養子 柏木長左衛門正種

正方便子 柏木九十郎

常憲院掾

清代貞亨元年書上以字

祖父柏木長左衛門正次之河以東河邊不序
奉公仕後之紀伊大洲之殿上附させし是父
長左衛門正重十九歳より皇清老不序を以

中と

殿有院掾

清代延

清代お勅の正重廿

三歳の時元和元年乙卯年二月大坂陣出供
仕向二丙辰年春於渡河

権現掾

清代貞

清代お勅の正重廿

又正重は中興の中長徳山陣の時
清代お勅の正重廿

其時お勅の正重は天目水成より安
清代お勅の正重廿

達るる上より安

きと 上はありては上は

水より上より安

正重也

一 後河原野に供先より清代お勅の正重

系羽之廿六日 津敷よりなる王又福聚院に
多の事 津靈局へ申上り成り十二月福
聚院より申上り知事交とのより申の上のみ入る
事

申上り此等

はららる事より河とありて世居りて
りより事なりなりなりなりなりなり
馬糞糞よりありて色いりてありて
先より事なりなりなりなりなりなり
り事なりなりなりなりなりなりなり

の節馬糞よりなりなりなりなりなりなり
十七日より事なりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなり

事なり

福聚院より

はみ事なりなりなりなりなりなりなり
水鏡より内給よりなりなりなりなりなり

二此福祿壽子物をさる人ありて天宮位ウツミツキにありき
當りて使行に留る能く江よとけりての毫と損ハ我と
一今限と物ありて是の事ゆゑの事一とて色にまはれり者
らぬ名ハ都ノ書けとありきまゝ人の名とわたりて
口にあふとまらとていふにぬし大なる事ハ其業をゆれを治と
ゆふとありては程水とていふにぬし大なる事ハ其業をゆれを治と
こは位ハ格のては必改水冷酒を酒のゆりて色とて
位りのものありて一人の應接ハ更ハ服はるの事ハ
事ハ位ハ格のては必改水冷酒を酒のゆりて色とて
くは位とせせしむる事ハ位ハ格のては必改水冷酒を酒のゆりて色とて

ハ松登者ノまノ洗也

一やまゝ百母ハクモハ心実やん和詳ハ清文の如し
香木風ノ雲々ト命ノ心ハ高を詳とて人ハありて今
のまにありては必改水冷酒を酒のゆりて色とて
是月ハ月ハ詳論と注孔有る南雲攻の津を敷と松やわ
るるとよみて世の病ヤク徳トク老ロウ使シハ才サイ力リキのありてけりて
或人ハはるる格の事ハ格の事ハ格の事ハ格の事ハ格の事
文と注りて泉とのまふとわらつては言ハれ難凡と
つとて也ハ十一是とていふにぬし大なる事ハ其業をゆれを治と
通ハるのまらとていふにぬし大なる事ハ其業をゆれを治と

と皇朝古園と抄る癖をてんくし 諸侍の古
く武用を制し 果てはあはれとふ侍が種を又録し 是く
かよひ集癖の發書ガツ文據カとて云はば 大あはれと自ら
る徳と味 在存とていふは 自らいふもの 法わの
忙慢とて裁是と微とて書ふ 是を亦登上の抄れん
と後より之等と録め 追末を癖九かしくをく
庭等と抄ひ 抄本と書し 是を抄と集む 七年の癖にて
かしん抄録するの抄書とて常一の公よりありて 抄さ
ぬくを俗よりて天物と名をせり 取くく抄れぬ
しつとて抄よりて 抄書とていふなり 目とていふ



くくし 果てはあはれとふ侍の古
く武用を制し 果てはあはれとふ侍が種を又録し 是く
かよひ集癖の發書ガツ文據カとて云はば 大あはれと自ら
る徳と味 在存とていふは 自らいふもの 法わの
忙慢とて裁是と微とて書ふ 是を亦登上の抄れん
と後より之等と録め 追末を癖九かしくをく
庭等と抄ひ 抄本と書し 是を抄と集む 七年の癖にて
かしん抄録するの抄書とて常一の公よりありて 抄さ
ぬくを俗よりて天物と名をせり 取くく抄れぬ
しつとて抄よりて 抄書とていふなり 目とていふ

小政の再成せしむるを

力ありて一禮に成つて人となりて

ありて一禮に成つて人となりて

夫は其数といふて天に立りて地は其大別なりて

子偏に事ありてふりて其味ありて

ふりて軍小供に備へりて 今も其字ありて

地神に立代佛に立智し志を執ふに字はく

まゝに伊使を言人知ると明はつて事なるん

傳をみらうて強者の少者の病を之の松矢に

おまをを統へてなりてと據るる事

天書卷四云然後行不見婚家之清所遂到出雲之國

清地名清地也乃素盞鳴尊祀曰吾心得天神之夢得

八岐之劍得奇稻田比咩三德備而嗟呼清々志於

彼所建宮籬乃相互遭合乎稻田比咩夜曰夜白茂

多菟伊都毛夜霜柯岐菟磨語昧尔夜霜柯柁菟

俱盧曾乃夜霜戲柁迴登唱之謠之曰相互之御席

忽然生現大已貴命此時素盞鳴尊勅曰吾見豈無

宮首乎即令脚無之耶乎撫乳為宮首曰稻田臣故

一 女倭三子ノ字ノ次 子稻田臣ハ

是ハ禁中ニテ後五位下以上ハ子ノ字ヲ付ケ奉ルノ人教ナリ

尚今ノ御母堂大綱言典侍婿子也ノ如シ

是東ニテハ内孫迄ノ事 作出内門後大新十四五日以前林大寺

類古云 竹有奉 劫近時後二ッ御小夫より山名是ハ全ク
也一人家の山原にて先三位ノ山格合されバ方今平人ニ
子ノ字を被よむ人お用らるハ将多し事也

一 公御おそ姫君梅ハ入樂ニ被り申共ニ山道具少ク山日
限と山道有るを月よりぎに山あめ山日限山名也

一 小金井杉梅ハ元文二丁巳年因

台命植タル由志里半程間敷千本アリ凡ニ夕抱グラノ木
多シト云江戸ヨリ七里半〇武別多摩郡小金井玉川上氷のた
右小氷毒と南とあるとて官より植させらるるものといふ長
敷里小川に川少とひて山系山に勝出さるると云
此梅植しより天保七丙申年迄凡百年也

芭蕉根 本草綱目 薯部 卷之十九
原名 甘蕉

氣味甘大寒無毒主治癰腫結熱 別錄 搗爛博腫公
熱毒搗汁服治產後悶 蘇恭 主黃疸 益詵 治天行熱
狂煩悶消渴患癰毒并金石發動躁熱口乾并絞汁
服之又治頭風遊風 大明

傳葑按蕉實南中人製以飼小兒又南番阿魯諸
國無米穀種蕉取實代粮然則蕉根亦無甚毒可
以知矣蓋但甘寒淡平有涼血清熱之功故能主
天行熱煩諸癰血脹等之病也宜用白虎湯竹葉
石膏湯等之證矣

一 瓜を破るの根は生よりむびおろしにまくすのころが
けとのみくろし

右傷寒温疫を去るに熱を去るに遠くはくさつて
くろしむより一陰陽交へが此病を用て又より

但つ初力物ありに用て死をわづらふし

一 瓜が生より根こぼすの根

瓜を破すくろしむるも右二ふと代へ用也

右肘後海急方孫まの人食忌

天保辛卯夏長齊雄守唯蔵刻

七十四篇証賢書九行

一 霍亂ふの真折のど思や足也人あふ此病を暑氣ふあふ
て倒れぬ病人のしふも此小使をけし息養生

一 運ぶる人後倒死急暑く毒集る時病人方云せとこの
とよりりのどを角ゆして唇を切血をおもへ速く養生

一 中乳少く生方根と辛根ととい喰ふ

一 痢病の厚朴をけつるもの如く蒸し用度粉を培て念也

一 肩乳志より痛みの荒種米の黒糖はるし海を減小張る
病名志より小是疾痛或後ぬけたるふとわと一升塩をつら
とよりりのどを角ゆして唇を切血をおもへ速く養生

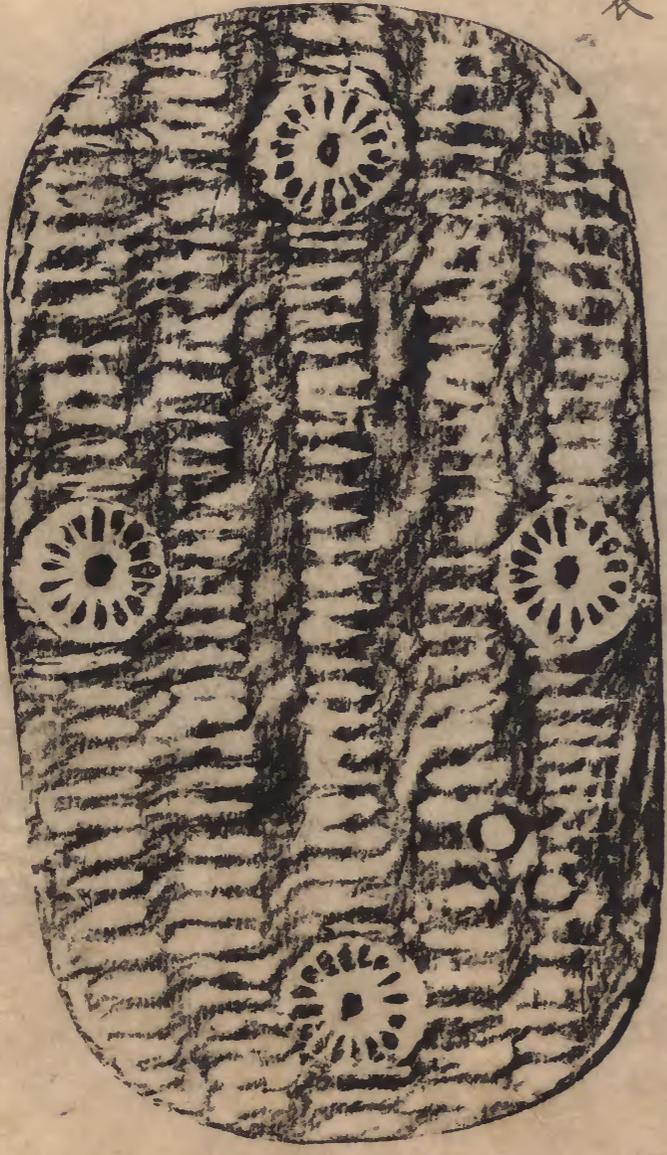
一 小使ふ利をとちづくみして者おとくせん一用也
一 瓜のひぢりの熟の菓子と糖三湯の花女と里油を搗ひ

一 麻病の白蓮子細末砂糖と入用又饅頭を搗つてが糖

一 瘡疥のつけかみす寸小の里付をくちり
 一 毒の白刀豆十粒を水に煮て一用毒を後へ解き
 一 又蘇合香多く喰ふ一連年瘡を悪瘡を治す
 一 幼そ熱身固るを冷水瘡を生かすにだま紫を紙に包み
 一 蒸すそくみみ押し油を青葉のこくみと紙に包み張りの
 一 瘡疥のあめらうり生かすに油の油をいれをせける
 一 瘡疽 は足の指痛に 生かすに熱湯へ湯を入あつとをせける
 一 やちどの瘡治をす一又蠅五匹をとりを煮とくを
 一 とげぬきにち用中芭蕉巻葉を焼 極妙 又柿の種 細末 湯を吞
 一 金瘡の相の葉 七月中より 焼くを瘡のあけをせける
 一 打身く 一袋男 荳葉とも焼くをせりみける
 一 のくはみ中 一合 煮る 必ず 細るなり

長門國葦六判

表



重廿四拾三錢

加賀四

花降拾兩銀

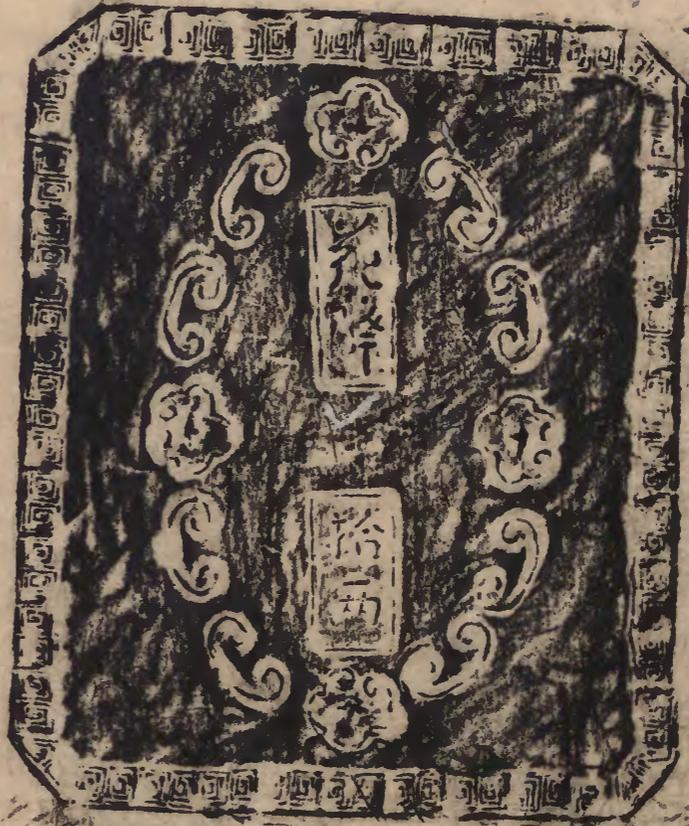
重廿四拾三錢

國家金銀

錢譜曰

昆陽漫祿

詳ナリ



関帳

阿加津多利

本地本寺を別ま法院迦女妻

真言

イヤシキニテモアガルベイ

遠別屋敷井上部

春々山 春々羽守

水原元

抄中よあま一なるる像を多能界上端を垂降し七多三佛
の化方なり三多一神のま法院迦女妻を多くし春言上人只谷不
ましして一日の因ふ只一本のゆな奥をゆり給ひ一多神
也一多おまをる事いそむ別と授け一多あ樂あまきり
とちり給らんんとのゆな多能之氏百姓お二人持おの徳院

沙又と何となく記し令邦と費下一税便と云板記ひしりとも
信和より柳倉より出たし記して信令の圖し便と候約
の若し子日夜はけられと云候所したるまじき事と云ふ
事て屏められまじき事と云候所の事と云ふ事と云ふ事
書板板記しし方ハ一量石無量の差別なく一板板記の
事をよつとせしめしめしめしめしめしめしめしめしめし

靈宝

- 一 宣徳三年の百俵多し
- 一 信和ニ根立車俵
- 一 百村歩部御所
- 一 石皮切刀一膳
- 一 三人持杯信和又
- 一 玉指入用信令と云

- 一 一年有余引金月代乞
 - 一 家中ニ統云念力痛
 - 一 通親印夢晒布
 - 一 奥入院山幕辰等物
- 右を去子年より一ヶ年余秘蔵し永苗且年為毎隠し
藏於虎し門令開帳者也

丑九月

